

北・中央ヴァヌアツ諸語の嚮数法とその分布について*

落合 いずみ

【要旨】北・中央ヴァヌアツ諸語にはひとつ上の十の位を用いる特殊な数え方（嚮数法）があることが古くから知られているが、北・中央ヴァヌアツ諸語に属するどの言語が嚮数法を持つかや嚮数法を持つ言語の分布は明らかでなかった。本研究は北・中央ヴァヌアツ諸語の6つの言語が嚮数法を持つこと、それらの言語は一つの地域にまとまっていること、これらの言語のうち嚮数法の用法を最もよく保持しているのはタマンボ語であることを示す。

キーワード：数詞 嚮数法 連結辞

1. はじめに

Greenberg (1978) は、さまざまな言語における数詞の構造を紹介している。数詞 11 以上の構造は足し算、掛け算または引き算を使うが、これらの方法に拠らない特殊な言語が、ウラル語族のいくつかにあるとし、一つ大きい桁を目指すという意味を込めて *going-on* 法と呼んでいる。オスチャーク *Ostyak* 語では、18 を「8 20」と並べ 20 に向かって 8 を表す。エストニア語では 18 を「第二の 10（へ向かう）8」と表現し、マンシ *Mansi* 語（旧称 *Vogul*）で 23 は「30 へ向かう 3」¹と表現する。

マヤ語族にも同様の数え方があり、Hurford (1975:235-239) ではこの数え方を *overcounting* 法と呼んでいる。例えば、20 進法の Chol *Ch'ol* 語において、数詞 45 は「60 (3×20) に向かう 5」²と表す (Merrifield 1968)。

また、碑文に見られる古代トルコ語にも同様の数え方があり、泉井 (1944) はこの数え方を嚮数法と呼んでいる。例えば、数詞 17 は *jiti jigirimi* 「7 20」であり、数詞 25 は *biš otuz* 「5 30」である。しかし 90 台の場合、92 は「2 100」と表せない。「2 100」は数詞 200 を意味するからである (泉井 1939)。Erdal (2004:221) によると 90 台は *ör-*「上がる」から派生した *örki* という語を 1 の位の後ろに置くことで構成する。例えば 99 は *tokuz örki* 「9 *örki*」で表す。

* 本稿の執筆にあたり松本亮氏、吉田豊先生、千田俊太郎先生、ふたりの査読者の方から有益な指摘をたくさんいただいた。お礼申し上げます。もちろん本稿の不備は著者の責任である。

¹ *vat-nupäl xurm* (Greenberg 1978:258)

² *hó?p'ehl iyuš k'äl* (二次資料 Hurford 1975:236 より引用)

さらに、オーストロネシア語族にも嚮数法が見られる。小川 (1944:465) は、南台湾と北フィリピン諸語の数詞の構成方法に特殊式—本稿で言うところの嚮数法—があると報告している。嚮数法をもつ南台湾諸語はパイワン Paiwan 語とアミ Amis 語であり、北フィリピン諸語はヤミ Yami 語、イバタン Ibatan 語、イロカノ Ilokano 語、タガログ Tagalog 語、カパンパガン Kapampangan 語、パンガシナン Pangasinan 語、イバナッグ Ibanag 語である (例 1)。ヤミ語は領土は台湾に属するが、台湾諸語ではなく他のフィリピン諸語と同じくマライ・ポリネシア諸語である。ヤミ語以外の言語はルソン島で話される。アミ語、パイワン語、ヤミ語は数詞 11 を例に挙げ、20 台からの例は載っていないが、「二十幾つの場合には三の数詞を用いている」とあるので、20 台も嚮数法を使うことがわかる。また、タガログ語の嚮数法は古形であり、イバナッグ語の嚮数法は 10 台にのみ使われると述べている。なお、語形と訳出は小川をそのまま引用し、グロスが執筆者が付け足したものである。

(1)

Paiwan	<i>pu-sika-dusa</i>	<i>poŋo?</i>	<i>no</i>	<i>ita</i>	
	PU-SIKA-two	ten	NO	one	
	「11」「今数える一の十は、第二回 (sika- dusa) にする十、即ち十台の一」				
Amis	<i>tsətsai</i>	<i>ko</i>	<i>saka-tosa</i>		
	one	KO	SAKA-two		
	「11」「第二回の十、即ち十台のものは一」				
Yami	<i>aʃa</i>	<i>o</i>	<i>ika-ɬuwa?</i>		
	one	O	IKA-two		
	「11」「第二回の十、即ち十台のものは一」				
Ibatan	Yami とほぼ同形				
Ilokano	<i>kan-ika-dua</i>	<i>pollot</i>	<i>ma-isa</i>		
	KAN-IKA-two	ten	MA-one		
	「11」「第二の十の一」				
Tagalog	<i>ma-ika-tlo-ng</i>	<i>isa</i>	<i>ma-ika-pat</i>	<i>dalawa</i>	
	MA-IKA-three-NG	one	MA-IKA-four	two	
	「21」「第三回に当たる一」		「32」「第四回に当たる二」		

Kapampangan	<i>meka</i> (< <i>ma-ika</i>)	<i>tolo</i>	<i>ng</i>	<i>metung</i>
	MEKA	three	NG	one
	「21」「第三回に当たる一」			
Pangasinan	Kapampangan とほぼ同形			
Ibanag	<i>min-ica-rua</i>	<i>fulu</i>		
	MIN-ICA-two	ten		
	「第二回に当たる十」			

イバナグ語の例は 10 台を数える場合に使う表現であり、これに後続するはずの 1 の位の数詞が省略されている。

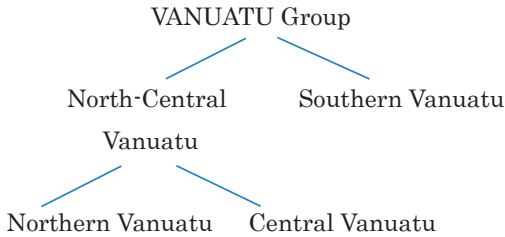
オーストロネシア語族、オセアニア語派、ヴァヌアツ諸語、北・中央ヴァヌアツグループのいくつかの言語にも嚮数法の記述が見られる（ただし南ヴァヌアツグループには見られない）。しかも、この地域で最も古い部類の研究にすでに記述があるのだが、そのときから見て今の研究状況に大きな進展が認められないようである。そこで本稿では、北・中央ヴァヌアツグループにおける嚮数法の構造と嚮数法を持つ言語の分布を調べることにした。

ヴァヌアツ共和国はオーストラリアから東に約 1750 キロメートルの場所に位置し、83 の島からなる（地図 1）。人口は約 23 万人で、公用語は英語・フランス語・ビスラマ語である。113 言語あるとされている現地語は全てオーストロネシア諸語であり、そのうち 110 言語がオセアニア語派のヴァヌアツ語群に属する（3 言語はポリネシア地域からの移住してきたポリネシア諸語である）。ヴァヌアツ語群 110 言語のうち、102 言語が北・中央ヴァヌアツグループに、8 言語が南ヴァヌアツグループに属する（Tryon 1976）。図 1 にヴァヌアツ語群の下位分類を示す。

本稿では北・中央ヴァヌアツグループから 28 の言語を考察対象にしている。言語の選択は数詞のデータが豊富にあるかどうかにより、数詞 1 から 10 まで、10 台、20 台から 90 台のデータがそろっている言語を選んだ。また、本稿の考察は全て先行研究の数詞データを基にしており、執筆者自身が調査したデータは含まれない。

嚮数法の議論の前に、次節では数詞 1 から 10 と 20 についてヴァヌアツ地域に見られる 4 つのタイプを説明する。第 3 節では北・中央ヴァヌアツ諸語において嚮数法以外を用いる言語とその構造などを述べ、第 4 節では北・中央ヴァヌアツ諸語に見られる嚮数法の構造と嚮数法の分布などを議論する。

図1 ヴァヌアツグループの下位分類 (Tryon 1996:170)



2. 北・中央ヴァヌアツの数詞のタイプ

数詞 11 から始まる嚮数法について議論する前に、まず数詞 1 から 10 と 20 を紹介する。まず本稿で扱われる 28 の言語について、数詞 1 から 10 と 20 による分類がどのタイプに属するかを説明し、第 3 節の数詞 11 以上の議論に繋げる。

Lynch (2009) はヴァヌアツの数詞 1 から 10 を 4 つのタイプ—十進法、不完全十進法、五進法、混合法—に分類している。³オセアニア祖語の数詞 1 から 10 まで—**ta-sa*、**sa-kai*、**tai*、**kai* 「1」、**rua* 「2」、**tolu* 「3」、**pati*、**pat* 「4」、**lima* 「5」、**onom* 「6」、**pitu* 「7」、**walu* 「8」、**siwa* 「9」、**sa-[ŋa]-puluq* 「10」(Lynch, Ross, Crowley 2002:72)—を保持し、数詞の 1 から 10 までそれぞれ独立した形式を持つ場合を「十進法」と呼ぶ。次に、「不完全十進法」とは数詞の 1 から 5 までと 10 は独立した形式を持ち、20 は 10 の倍数で表されるが、数詞 6 から 9 までは数詞 1 から 4 に依存した形式のことを指す。また、この分類における「五進法」とは数詞 1 から 5 まで独立した形式を持ち、数詞 6 から 9 までは数詞 1 から 4 に依存した形式で、10 は数詞 5 を基に「2×5」と表現され、20 は「人ひとり」などの表現を使うパターンのものである。「混合法」とは、数詞 1 から 9 は不完全十進法 (6 は 5+1、7 は 5+2 など) だが、10 は「2×5」と表す五進法であって、さらに 20 は十進法のように 10 の倍数を使うというパターンを指す。数詞 1 から 10 までの 4 タイプの分布は Tryon (1996) と Lynch (2009) を基に作成した地図 1 に示した。

本稿で取り上げる 28 言語のうち、十進法は 8 言語、不完全十進法は 16 言語、五進法は 2 言語、混合法は 2 言語であった。それぞれの言語の位置は地図 2 で示してある。十進法は、ノクク Nokuku 語、ツツバ Tutuba 語、タマンボ Tamambo 語、ウリピブ Uripiv 語、アラキ Araki 語、東北アンバエ North-east Ambae 語、ラガ Raga 語、アンバエ Ambae 島の一言語に用いられる (例 2)。Lynch (2009) が指摘するように、アラキ語の場合数詞 6 から 9 までは 1 から 5 までに用いられていない接辞 *ha(i)-* が 6 から 9 を表す形式についているため、不完全十進法へ移行する中途段階の様相を呈している。以下の例では、

³ Lynch (2009) でも注意喚起しているように、ここでの「10 進法」や「5 進法」は数学的な定義とは異なる定義で用いている。

言語名の下に島名を記す。

(2) 北・中央ヴァヌアツの十進法

Proto Oceanic	Nokuku	Tutuba	Tamambo	Uripiv
	Santo	Tutuba	Malo	Malakula
1 * <i>ta-sa</i> etc.	<i>tewa</i>	<i>etea</i>	<i>atea</i>	<i>san</i>
2 * <i>rua</i>	<i>rua</i>	<i>erua</i>	<i>arua</i>	<i>eru</i>
3 * <i>tolu</i>	<i>tolu</i>	<i>etol</i>	<i>atolu</i>	<i>itul</i>
4 * <i>pat(i)</i>	<i>vati</i>	<i>ev'ati</i>	<i>avati</i>	<i>ivij</i>
5 * <i>lima</i>	<i>lima</i>	<i>elima</i>	<i>alima</i>	<i>elim</i>
6 * <i>onom</i>	<i>ono</i>	<i>eono</i>	<i>aiono</i>	<i>ouon</i>
7 * <i>pitu</i>	<i>pitu</i>	<i>eb'itu</i>	<i>ambitu</i>	<i>ambut</i>
8 * <i>walu</i>	<i>olu</i>	<i>oalu</i>	<i>awalu</i>	<i>ouil</i>
9 * <i>siwa</i>	<i>jiwa</i>	<i>esua</i>	<i>asuwa</i>	<i>esu</i>
10 * <i>sa-[ŋa]-puluq</i>	<i>nowul(u)</i>	<i>saŋavul</i>	<i>sangavulu</i>	<i>esgavul</i>
20	<i>nowul rua</i>	<i>ŋavul erua</i>	<i>ngalai rua</i>	---
Proto Oceanic	Araki	Raga	N.E Ambae	Ambae
	Araki	Pentecost	Ambae	Ambae
1 * <i>ta-sa</i> etc.	<i>mo hese</i>	<i>gaituwa</i>	<i>gatawale</i>	---
2 * <i>rua</i>	<i>mo dua</i>	<i>gairua</i>	<i>gairue</i>	<i>gairue</i>
3 * <i>tolu</i>	<i>mo rolu</i>	<i>gaitolu</i>	<i>gaitolu</i>	---
4 * <i>pat(i)</i>	<i>mo v'ari</i>	<i>gaivasi</i>	<i>gaivesi</i>	<i>gavesi</i>
5 * <i>lima</i>	<i>mo lim'a</i>	<i>gailim'a</i>	<i>gailime</i>	<i>gailime</i>
6 * <i>onom</i>	<i>mo hairon(o)</i>	<i>gaiono</i>	<i>gaiono</i>	---
7 * <i>pitu</i>	<i>mo haip'iru</i>	<i>gaibitu</i>	<i>gaivitu</i>	---
8 * <i>walu</i>	<i>mo haualu</i>	<i>gaiwelu</i>	<i>gaiwelu</i>	<i>gaiwelu</i>
9 * <i>siwa</i>	<i>mo haiusa</i>	<i>gaisiwo</i>	<i>gaisiwo</i>	---
10 * <i>sa-[ŋa]-puluq</i>	<i>sagavul(u)</i>	<i>haŋavulu</i>	<i>hangavulu</i>	<i>ŋavulu</i>
20	<i>mo gavul dua</i>	<i>ŋavulu gairua</i>	<i>ngavulu gairue</i>	---

28 言語のうち 16 の言語が不完全十進法を持つ。これらはロー Loh 語、ノルバルバル Norbarbar 語、モトラブ Motlav 語、モタ Mota 語、プレス Vurës 語、ヌメ Nume 語、ラコン Lakon 語、マリノ Marino 語、トロマコ Tolomako 語、サカオ Sakao 語、アケイ Akei 語、タンゴア Tangoa 語、ビッグナンバス Big Nambas 語、ナーティ Naati 語、アウルア Aulua 語、ロンウォルウォル Lonwolwol 語である。不完全十進法の例 (3) では数詞

6 から 9 において 1 から 4 を示す音素列を太字にしてある。ナーティ語のみ、20 は 10 の倍数として表されるのではなく、独自の形式である *mwarlala* を用いている。

(3) 北・中央ヴァヌアツの不完全十進法

	Loh	Norbarbar	Motlav	Mota	Vurēs
	Torres Is.	Banks Is.	Banks Is.	Banks Is.	Banks Is.
1	<i>vujia</i>	<i>votowa</i>	<i>vitwag</i>	<i>tuwale</i>	<i>tuwel</i>
2	<i>vurua</i>	<i>vorō</i>	<i>vorō</i>	<i>nirua</i>	<i>niro</i>
3	<i>vetal</i>	<i>votol</i>	<i>vetel</i>	<i>nitōl</i>	<i>nitōl</i>
4	<i>vevat</i>	<i>vovet</i>	<i>vevet</i>	<i>nivat</i>	<i>nivat</i>
5	<i>tevelim^{wa}</i>	<i>tevelim^w</i>	<i>tevelem^w</i>	<i>tavelim^{wa}</i>	<i>tevelem^w</i>
6	<i>livijia</i>	<i>levejea</i>	<i>levete</i>	<i>laveatea</i>	<i>levete</i>
7	<i>laverua</i>	<i>levero</i>	<i>liviro</i>	<i>lavearua</i>	<i>lovorō</i>
8	<i>lavetal</i>	<i>levetol</i>	<i>levetel</i>	<i>laveatol</i>	<i>lovotol</i>
9	<i>livvat</i>	<i>levevet</i>	<i>levevet</i>	<i>laveavat</i>	<i>levevat</i>
10	<i>heḡawul</i>	<i>saḡowul</i>	<i>soḡwul</i>	<i>saḡavul</i>	<i>sam^wul</i>
20	<i>heḡawul rua</i>	<i>saḡowul ra</i>	<i>soḡwul voro</i>	<i>saḡavul rua</i>	---
	Nume	Lakon	Marino	Tolomako	Sakao
	Banks Is.	Banks Is.	Maewo	Santo	Santo
1	<i>tuwal</i>	<i>tuwa</i>	<i>tewa</i>	<i>tea</i>	<i>té</i>
2	<i>iru</i>	<i>niru</i>	<i>irua</i>	<i>rua</i>	<i>ru</i>
3	<i>itol</i>	<i>nitel</i>	<i>tolu</i>	<i>tol</i>	<i>ḡæl</i>
4	<i>ivat</i>	<i>nivas</i>	<i>ivat</i>	<i>vati</i>	<i>ieḡ</i>
5	<i>tevelim</i>	<i>tivilem^w</i>	<i>tavalima</i>	<i>lina</i>	<i>læn</i>
6	<i>levete</i>	<i>letuwa</i>	<i>lavatea</i>	<i>arave</i>	<i>lænara</i>
7	<i>leveru</i>	<i>levuru</i>	<i>lavarua</i>	<i>verua</i>	<i>lænereru</i>
8	<i>levetol</i>	<i>lavitel</i>	<i>lavatol</i>	<i>vetou</i>	<i>læneretæl</i>
9	<i>levevat</i>	<i>lavas</i>	<i>lavat</i>	<i>ratati</i>	<i>lænerepeḡ</i>
10	<i>saḡovul</i>	<i>gāpra</i>	<i>sa(ḡ)wul</i>	<i>saḡovul</i>	---
20	<i>saḡovul rua</i>	<i>gāpra ru</i>	<i>sawulu rua</i>	<i>saḡovul rua</i>	---

	Akei	Tangoa	Big Nambas	Naati	Aulua
	Santo	Tangoa	Malakula	Malakula	Malakula
1	<i>mo 'ese</i>	<i>ma tea</i>	<i>isət, iəmək</i>	<i>isi'</i>	<i>bokol</i>
2	<i>mo rua</i>	<i>ma rua</i>	<i>iru'</i>	<i>iru</i>	<i>enrua</i>
3	<i>mo tolu</i>	<i>ma tolu</i>	<i>itl</i>	<i>itül</i>	<i>entil</i>
4	<i>mo vati</i>	<i>mo thati</i>	<i>iv'a</i>	<i>ivös</i>	<i>embis</i>
5	<i>mo lima</i>	<i>mo lija</i>	<i>iləm'</i>	<i>ilim</i>	<i>elima</i>
6	<i>mo 'a'ese</i>	<i>mo lijarave</i>	<i>ilemsei</i>	<i>seusi'</i>	<i>robokol</i>
7	<i>mo ravu 'arua</i>	<i>mo lijaraverua</i>	<i>isaru</i>	<i>seuru</i>	<i>rokurua</i>
8	<i>mo ravu 'atolu</i>	<i>mo lijaravetolu</i>	<i>isatl</i>	<i>seutül</i>	<i>rokitil</i>
9	<i>mo ravu 'avati</i>	<i>mo lijaravethat</i>	<i>isav'et</i>	<i>seuvei</i>	<i>rokbis</i>
10	<i>mo sanavulu</i>	<i>sagavulu</i>	<i>sənal, inal</i>	<i>langavöl</i>	<i>sagavul</i>
20	<i>mo navulu rua</i>	<i>mo gavulu rua</i>	---	<i>mwarlala isi'</i>	---
	Lonwolwol				
	Ambrym				
1	<i>hu</i>				
2	<i>ru</i>				
3	<i>sUl</i>				
4	<i>vir</i>				
5	<i>lim</i>				
6	<i>lise, lise</i>				
7	<i>luro</i>				
8	<i>lisUl</i>				
9	<i>jafer</i>				
10	<i>səjavül, ηavül</i>				
20	<i>ηavül(an) ηa ru a hu</i>				

アンブリム島の東南アンブリム語とパアマ島のパアマ語の二言語は五進法を示す(例)。⁴パアマ語において数詞 10 を表す形式は 2 (*lu*) と 5 (*lim*) の形態が認められる。東南アンブリム語の形式には 2 (*lu*) が認められる。全体の意味は「手が二つ」なので $2 \times 5 = 10$ を表している。数詞 20 はどちらも「人」を表す語を用いている。

⁴ Lynch (2009) では、エピ島の北に位置するアンブリム島とパアマ島は不完全十進法が分布するとされているが、Lynch 自身、東南アンブリム語は五進法に分類している。

(4) 北・中央ヴァヌアツの五進法

	S.E Ambrym	Paamese
	Ambrym	Paama
1	<i>te(i), teik</i>	<i>tai</i>
2	<i>lu</i>	<i>elu</i>
3	<i>tool</i>	<i>etelu</i>
4	<i>hat</i>	<i>ehat</i>
5	<i>lim</i>	<i>elim</i>
6	<i>tehesap</i>	<i>ahetai</i>
7	<i>luhesap</i>	<i>aulu</i>
8	<i>toolhesap</i>	<i>autelu</i>
9	<i>hathesap</i>	<i>auhat</i>
10	<i>heralu</i> “2 hands”	<i>halualim</i>
20	<i>hanu tap</i> “a person”	<i>hanu mau (tai)</i> “a person full”

数詞 10 を「2×5」と表し、数詞 20 を「2×10」と表す混合法はエファテ島の北に位置するナカナマンガ語とエファテ島の南エファテ語に見られた。

(5) 北・中央ヴァヌアツの混合法

	Nakanamanga	South Efate
	Nguna	Efate
1	<i>sikai</i>	<i>iskei</i>
2	<i>dua, rua</i>	<i>rua</i>
3	<i>dolu, tolu</i>	<i>tolu</i>
4	<i>pai</i>	<i>bate</i>
5	<i>lima</i>	<i>lima</i>
6	<i>latesa</i>	<i>latesa</i>
7	<i>larua</i>	<i>larua</i>
8	<i>latolu</i>	<i>latolu</i>
9	<i>laveti</i>	<i>lafiti</i>
10	<i>dualima, rualima</i>	<i>relima</i>
20	<i>rualima rua</i>	<i>relima rua</i>

次に、数詞が名詞を伴って現れる場合の構造を紹介する。ツツバ語を記述した研究である内藤 (2011)から数詞 1、2、4、5 の例文を (5-9) に挙げた。⁵ 数詞を伴った名詞句

⁵ タマンボ語において数詞が名詞を伴う例は Jauncey (2011:185-186) に挙げられている。

は太字で示している。名詞句内の語順は非修飾語の名詞が前、修飾語の名詞が後ろである（例文のグロスは ART 冠詞、CDN 基数、CLASS 類別詞、CONJN 接続詞、IMP 命令形、ITJ 間投詞、PL 複数、POSS 所有者代名詞、PP 前置詞、R 既然法、REF 前方照応、SG 単数）。

- (6) *vavine-i ma=tarai ma=ravti na susu-na ma=subu na*
 女性-REF 3SG.R=もぐ 3SG.R=取る ART 乳房-3SG.POSS 3SG.R=引っ張る ART

susu-na e-tea ro me=r e=an boi a-m

乳房-3SG.POSS CDN-1 CONJN 3SG.R=言う 2SG.IMP=食べる 豚 CLASS-2SG.POSS

「女の灌木の精は自分の乳房をもぎ取り、そして『ほら、あなたのための豚肉よ、お食べなさい』と言った。」（内藤 2011:500）

- (7) *na boŋ e-tea ro tamoloi e-tea ro*
 PP 日 CDN-1 ITJ 人 CDN-1 CONJN

mesa-na ro=vasu natu-ra e-rua

妻-3SG.POSS 3PL.R=産む 子供-3PL.POSS CDN-2

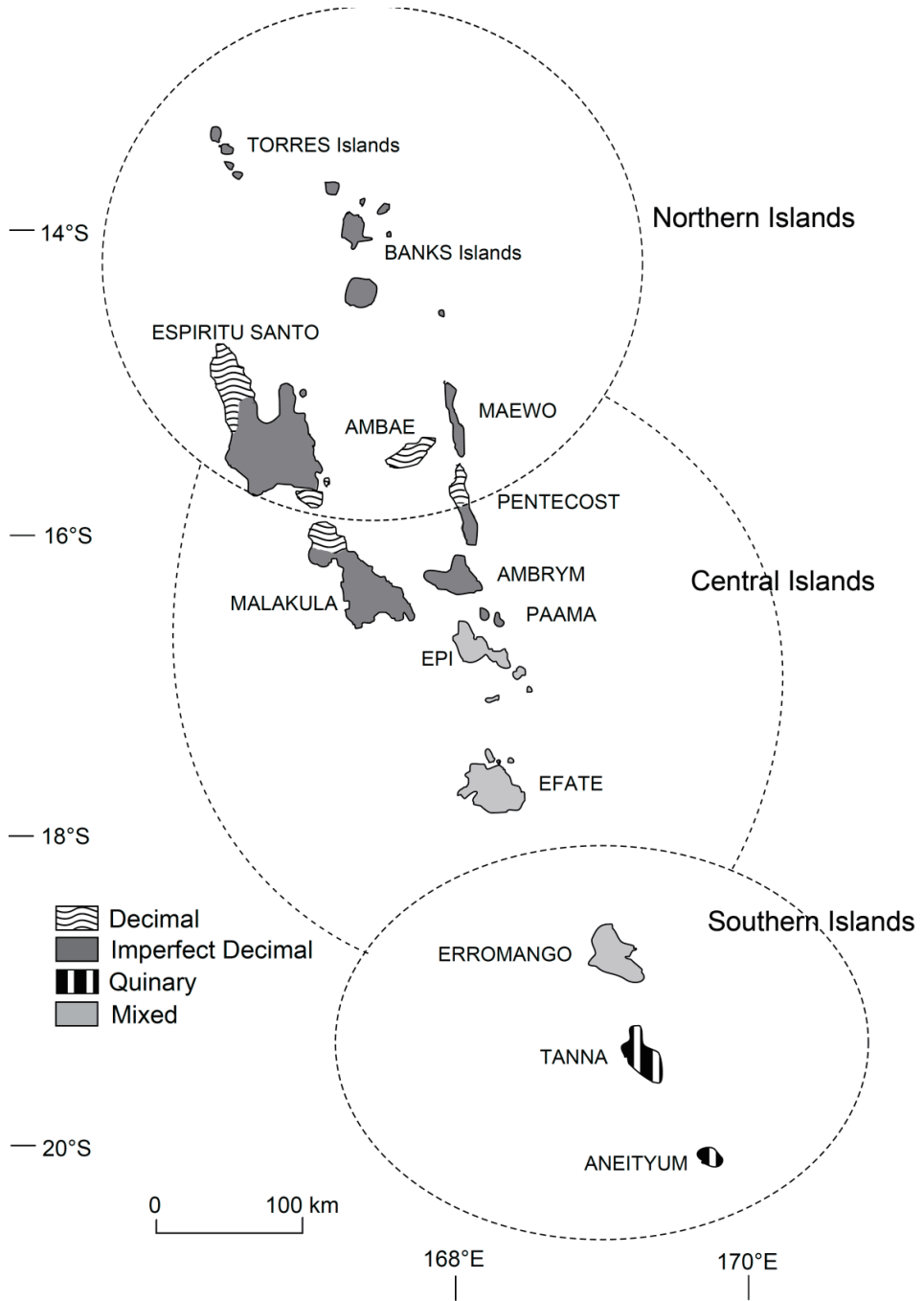
「あるとき、2人の子供を持つ夫婦がいた。」（内藤 2011:496）

- (8) *ro=lsu toa e-v'ati sur annanna-i*
 3PL.R=殺す 鶏 CDN-4 PP 宴-REF
 「彼らは宴のために鶏を4羽殺した。」（内藤 2011:134）

- (9) *nno=an m'asi e-lima vuisa*
 1SG.R=食べる 魚 CDN-5 Vuisa
 「私はボキサ島で魚を5匹食べた。」（内藤 2011:93）

ここまで、本稿で数詞を扱う北・中央ヴァヌアツグループの28言語について1から10と20に基づく数詞の分類について概観した。第3節では数詞11以上に連結辞を用いる言語を紹介し、第4節では数詞11以上（または21以上）に嚮数法を用いる言語を挙げ、その構造と分布を示す。

地図1 ヴァヌアツにおける数詞1から10の4タイプの分布



3. ヴァヌアツ諸語の非嚮数法—連結辞型

11 以上の数詞に嚮数法を用いない言語は、10 の位と 1 の位を結ぶのに連結辞を用いる。本稿で扱う 28 言語のうち、22 言語が連結辞型である。連結辞型の構造は、10 または 10 の倍数を先に述べ、1 の位を後置する。10 の倍数と 1 の位の数詞は「足す」などを意味する語でつなぐことが多い。例 (10) でヌメ語の数詞 11 を示す。

(10) *sajovul tuwal dom^men teru*
 ten one plus three
 「11」

例(10) において *sajovul* 「10」の後ろに続く *tuwal* 「1」は乗数を表わしている。このように、先行要素が十の位であることを示し、後続要素が十の位の値を示す構造は、ヴァヌアツ地域の名詞句が一般的に被修飾語—修飾語の順であることと関係する。(Codrington 1885)。また、例 (10) で「足す」の機能をする語は *dom^men* である。これはメラネシア地域のみならずポリネシア地域にまで広がる語で (Codrington 1885:232-233)、Lynch (2009) では **dum^ma-* と再建されている。⁶

北・中央ヴァヌアツ諸語の各文献を調べたところ加算法を用いる言語は、21 見つかった—ロー語、ノルバルバル語、モトラブ語、モタ語、ヴレス語、ヌメ語、ラコン語、マリノ語⁷、東北アンバエ語、ラガ語、サカオ語、ノクク語、トロマコ語、ロンウォルウォル語、ウリピヴ語、アウルア語、ナーティ語、ナカナマンガ語、東南アンプリム語、パアマ語、南エファテ語となる。⁸

21 言語のうち、ロー語、サカオ語、ノクク語、トロマコ語、ロンウォルウォル語を除く 16 言語は **dum^ma-* 由来の語を連結辞として用いる。また、次節では 10 台 (数詞 11 から 19) と 20 台から 90 台 (数詞 21 から 99) の構造の違いが問題になるため、本節でも 10 台と 20~90 台のデータの両方を挙げる。なお、データには 3 つの例外がある。

⁶ 本研究で *m^m* と表す音素は、Codrington (1885) ではイタリックの *m* に相当し、*ŋ* はイタリックの *n* に相当する。

⁷ Marino は Codrington (1885) が Maewo と呼ぶ言語である。Maewo 島のどの言語か特定できないのだが、「島の北端で話される言語」との記述と、Tryon (1976) のヴァヌアツ言語地図に依拠し、Maewo 島北端に分布する Marino だと推定した。

⁸ マラクラ島南部の諸言語について Charperntier (1987) を参照すべきとの指摘を受けた。Charperntier は、本稿で扱っている Aulua のほか、18 のマラクラ島南部言語の数詞を分類している。これらの言語は、Nilolenien (Reppanbitip), Natanggan, Nasarian, Nahava, Ninde, Navwien, Mbotkote, Ayiulian, Axamb, Avok, Vetmbao, Port Sandwich, Uliveu, Pangkumu, Vartabo (Banam Bay), Mbwenelaj, Faraun, Mbotkot である。全て不完全十進法であり、11 以上は数詞に付く接辞や連結辞の種類によって分類している。アラキ語の 20~90 台のように 10 の位と 1 の位を並置する言語も見られる。しかし、嚮数法を用いる例は無い。

ナーティ語においては20～90台は **dum*^w*a-* 由来ではない連結辞 *no'oron* を用いる。アラキ語においては20～90台は連結辞を用いず、10の位と1の位を並置している。東南アンブリム語の10台でも *dum*^w*a-* 由来の連結辞は用いられていない。

(11) **dum*^w*a-* 由来の連結辞を用いる言語

Norbarbar	<i>sajowul towa ne demwe votowa</i>	11
	<i>sajowul towa ne demwe votowa</i>	22
Motlav	<i>sojwul voro nadmwe vetel</i>	23
Mota	<i>sajavul tuwale o numwei tuwale</i>	11
	<i>sajavul tolu o numwei me vat</i>	34
Vurës	<i>samwul tuwel damwe nitol</i>	13
	<i>samwul vat demwe niro</i>	42
Nume	<i>sajovul tuwal domwen teru</i>	12
	<i>sajovul tol domwen tevat</i>	34
Lakon	<i>gapra jimwe tuwa</i>	11
	<i>gapra ru jimwe nitel</i>	23
Marino	<i>sawulu rua domwan itol</i>	23
N.E Ambae	<i>hangavulu domwagi gatawale</i>	11
Raga	<i>hañavulu domwan gairua</i>	12
	<i>ñjavul gaivasi domwan gaiono</i>	46
Araki	<i>mo sagavul comana mo hese</i>	11
	<i>mo gavul dua mo hese</i>	21
Uripiv	<i>gavul ouil dromon ivij</i>	84
Aulua	<i>sagavul nentemkukte bokol</i>	11
	<i>gavul rokbis nentimukte rokbis</i>	99
Nāti	<i>langavöl nentumön isi‘</i>	11
	<i>mwarlala‘ isi‘ no‘oron isi‘</i>	21
Nakanamanga	<i>rualima sikai tamate sikai</i>	11
	<i>rualima pati tamate latesa</i>	46
S.E Ambrym ⁹	<i>te ele</i>	11
	<i>hanutap tei teimUn</i>	21
Paamese ¹⁰	<i>teIn dan tai</i>	11

⁹ Paton (1971:120) に於いて *ele* の *le* は足を意味し、11の表現の直訳は“one on leg also?”となっている。21は“1 person, 1 more on another man”という注釈である。

¹⁰ Paton (1971:120) に於いて 11は“the thing always down, i.e. leg, 1”という注釈である。75は「20×3+15」という構造をしている。11に見られる *teIn* と 75に現れる *tendenelim* 「15」の前部の *ten* は、英語の *ten* 「10」からの借用という可能性もあるだろう。

	<i>hanumai etelu ka tendenelim</i>	75
S. Efate	<i>relima iskei temati latolu</i>	18
	<i>relima latolu temati bate</i>	84

**dum*^{va}- 由来の語以外の連結辞を用いるのはロー語、サカオ語、ノクク語、トロマコ語、ロンウォルウォル語の5言語である。

(12)	* <i>dum</i> ^{va} - 以外の連結辞を用いる言語	
Loh ¹¹	<i>heɣawul tuwaga mahalin vetal</i>	13
Sakao ¹²	<i>aðæŋæŋ ɣamyælté ɣa-βan ru</i>	12 persons
	<i>mæɣæ-lénara βan lénerepeð</i>	69
Nokuku	<i>nowul tewa rav tewa</i>	11
	<i>nowul pitu rav ono</i>	76
Tolomako ¹³	<i>saŋovul vat na vana movat</i>	44
Lonwolwol	<i>saŋavül a hu</i>	11
	<i>ŋavül(an) ŋa ru a hu</i>	21

4. ヴァヌアツ諸語の嚮数法と分布

数詞 11 以上を表す場合、ヴァヌアツ諸語の六つの言語—1. ツツバ語、2. アンバエ島の一言語、3. タンゴア語、4. アケイ語、5. ビッグナンバス語、6. タマンボ語—において嚮数法が使われる。本節では、ヴァヌアツ諸語に見られる嚮数法の構造、それぞれの言語において嚮数法が使われる数字、嚮数法が分布する地域を示す。

4.1 ツツバ語の嚮数法

まず、ツツバ語を用いて、ヴァヌアツ諸語の嚮数法に共通する構造を説明する。例えば数詞の 26 は「20 第 30 6」と表現し、「十の倍数 次の十の倍数の序数表現 一の位」という構造を持つ。三つの部分からなるので、それぞれの要素を A (十の倍数)、B (次の十の倍数の序数表現)、C (一の位) と称することにする。例 (13) において、A に当たる *ŋavul-erua* は「20」、B に当たる *ŋavul-etol-na* は「第 30」、C に当たる *eono* は「6」を指す。以下の例文でグロスの ORD は序数、PART は助詞を表す。

¹¹ “The unit above ten is *mahalin*, its (sum) above, *mahali* being a Noun meaning what is above, the air, sky.” (Codrington 1885:400)

¹² Guy (1974:85) に於いて「12 人」の直訳は、“they are ten and bear fruit, two” である。

¹³ “The unit above tens is *na vana*, its sum above.” (Codrington 1885:449)

- (13) *ɲavul-erua ɲavul-etol-na eono*
 ten-two ten-three-ORD six
 「26」

表 2 の図式で説明する。X が 10 の位、I が 1 の位（端数の数）を表すとする。数詞 26 の場合は、10 の束が二つあることになる。それが A 「20」として表される。残りの 6 つは次の 10 の位に含まれると考える。次の 10 の位は 10 の束の三つ目に当たるため、これを B 「第 30」と表す。そして、端数の 6 を C で付け加える。

表 2 嚮数法の図式化

10 の位	X	X	(→A 'twenty')	X	(→B 'the thirtieth')
1 の位	III III III	III III III		III III	(→C 'six')

ヴェヌアツ諸語の嚮数法は、ウラル語族エストニア語や、マヤ語族 Chol 語、古代トルコ語、南台湾・北フィリピン諸語に見られる嚮数法とは異なる構造を持つ。ヴェヌアツ諸語の嚮数法は A、B、C の三つの要素を用いるが、その他の嚮数法では A の要素を用いず、B と C のみを用いる。つまり、一つ上の十の倍数と一の位のみを用いる。また、ヴェヌアツ諸語の嚮数法とエストニア語・Chol 語・古代トルコ語などの嚮数法との違いは、B に序数表現を用いることである。ただ、B に序数表現を用いることは、ヴェヌアツ諸語と同様オーストロネシア語族に属する南台湾・北フィリピン諸語と共通している（例 (1) にある小川 (1944) の訳出を参照）。

古代トルコ語の嚮数法は CB の語順であり、90 台 (91 から 99) の場合は異なる構造を持つ。例えば嚮数法の構造「2 100」は 200 を意味するため、92 を意味することができなかった。ところが、ツツバ語では他の嚮数法にはない A の要素が加わっていることに加え、B は基数ではなく、序数表現を採っているため、例えば「100 2」が 200 と混同されることがない。ツツバ語では、90 台も 10 台から 80 台と同様の構造で表す。ツツバ語以外で嚮数法を持つバヌアツ諸語の 90 台のデータは、管見の限り得られなかった。

ツツバ語の例 (14) では、A に相当するのが *ɲavul-esua* 「90」、B に相当するのが *ɲal-saɲavul-na* 「第 100」、C に相当するのが *ev'ati* 「4」である。B の *ɲal-saɲavul-na* の第一形態素 *ɲal* は他には分布しない形式だが、全体は 100 を表すので、その意味的構成は 10 番目の 10、つまり *ɲal* は 10 を表す *ɲavul* に由来する形式と見てよいだろう (*saɲavul* はさらに *sa-ɲavul* と形態素分析でき、*sa* は「1」を表わしている)。¹⁴

¹⁴ *ɲal* という形式がどのように作られたかについて査読者から質問を受けた。*ɲal* は *ɲavul*

- (14) *ŋavul-esua ŋal-saŋavul-na ev'ati*
 ten-nine ten-ten-ORD four
 「94」

しかしながら、内藤 (2011:150-156) によると、ツツバ語の嚮数法は数詞 11 から始まるのではなく、数詞 21 から始まる。ツツバ語の数詞 11 から 19 までは オセアニア祖語 **dum^wa-* 由来の連結辞 *doman* を用いて表現する (15)。また、内藤 (2011) では、ツツバ語の数詞 21 から 99 までは嚮数法を用いるが、A (十の倍数) を省略した表現 (16-17) も使われると説明している。例 (16) は (13) の省略形、(17) は (14) の省略形である。省略形と非省略形の間には有標性、レジスター、丁寧さなどの差異があるかどうかは定かでない。¹⁵

- (15) *saŋavul doman erua*
 ten plus two
 「12」

- (16) *ŋavul-etol-na eono*
 ten-three-ORD six
 「26」

- (17) *ŋal-saŋavul-na ev'ati*
 ten-ten-ORD four
 「94」

4.2 アンバエ島の一言語の嚮数法

Codrington (1885:232-233) は、アンバエ島 (旧名レパーズ Leper's 島) に特殊な数え方があると述べているが、この島のどの地域で話されるかや、その言語名は特定していない。ここで言う特殊な数え方とは、嚮数法のことである。数詞 48 は (18) のように表

から中間の音素である *vu* を脱落させることで得られるが、これに類する音変化は内藤 (2011) のツツバ語の音韻に関する部分にはみられない。だが、数詞の音節短縮化という点で類似している一例を挙げることにする。マライ・ポリネシア祖語 **sa-ŋa-Ratus* 「100」から第一音節 (*sa*) と最終音節のオンセット以外 (*us*) が脱落し *ŋaRat* になった後で、*R* が脱落し、最終的に *ŋat* になる (Lynch 2009)。

¹⁵ ツツバ語は 100 の位も嚮数法を用いる。535 は「500 第 600 30 第 40 5」と表現する (内藤 2001:152)。アケイ語も 100 の位に嚮数法を用いる (Ray 1926:383) が、ビッグナンバス語は 100 の位から連結辞を用いる (Fox 1979:88-91)。タマンボ語、タンゴア語、アンバエ島の一言語は 100 の位での嚮数法の有無が文献からは確認できないため、本稿では 100 以上の数詞は扱っていない。

現する。Aは *navulu-gavesi*「40」、Bは *navulu-gailime-gi*「第 50」(序数を表わす接辞は *-gi*)、Cは *gaiwelu*「8」である。A、B、Cから成り、Bには序数表現を用いている。ツツバ語の例 (13) と全く同じ構造である。

- (18) *navulu-gavesi navulu-gailime-gi gaiwelu*
 ten-four ten-five-ORD eight
 「48」

このアンバエ島の一言語において、10 台 (11 から 19 まで) は連結辞を用いる例が挙げられている。例 (19) で数詞 12 を示す。ツツバ語の 10 台同様、**dum^{va}a-* 由来の連結辞である *domwagi* を使う。

- (19) *sajavulu domwagi gairue*
 ten plus two
 「12」

4.3 タマンボ語の嚮数法

ツツバ語とアンバエ島の一言語における嚮数法は 20 台から用いられ、10 台では連結辞法であったが、タマンボ語では 10 台も嚮数法を用いる (Jauncy 2011:159-160)。例 (20) で嚮数法を用いた数詞 11 を示す。Aが *sangavulu*「10」、Bが *ngalai-rua-na*「第 20」、Cが *atea*「1」である。例 (21) で数詞 21 を示す。Aが *ngalai rua*「20」、Bが *ngalai tolu-na*「第 30」、Cが *atea*「1」である。タマンボ語は嚮数法を用いる数字の範囲が 10 台から 90 台と、ヴァヌアツ諸語で嚮数法を持つ言語の中で最も広い。

- (20) *sangavulu ngalai-rua-na atea*
 ten ten-two-ORD one
 「11」

- (21) *ngalai rua ngalai tolu-na atea*
 ten two ten three-ORD one
 「21」

しかしながら、Jauncy (2011) によれば、10 台の数は、マロ島東側の方言から借用した連結辞法を代替として用いることもあるという (22)。この連結辞型は、ツツバ語やアンバエ島の一言語にみられる 10 台の構造「10 **dum^{va}a-* 1 の位」の第一要素の 10 を省略した構造を持つ。例 (22) に見られるように「**dum^{va}a-* 1 の位」のみで 10 台

を表す。タンゴア語での連結辞は *domana* を用いる。

- (22) *domana atea*
 plus one
 「11」

4.4 タンゴア語の嚮数法

タンゴア語はツツバ語と同様、10台の数詞は連結辞型を用いる (23)。20台からは嚮数法を用いる。例 (24) は数詞の 21 を示す。A に当たるのが、*mo gavulu-rua* 「20」、B に当たるのが *gavul-tol-na* 「第 30」、C に当たるのが *tea* 「1」である。しかし、聖書のタンゴア語への翻訳においては、20台から連結辞法に類似した例 (25) も見られる (連結辞は用いずに 10 の位と 1 の位を並置している)。

- (23) *mo sagavulu romana ma tea*
 PART ten plus PART one
 「11」

- (24) *mo gavulu-rua gavul-tol-na tea*
 PART ten-two ten-three-ORD one
 「21」

- (25) *mo gavulu-thati mo lijarave*
 PART ten-four PART six
 「46」

4.5 アケイ語の嚮数法

アケイ語でも 10台は連結辞型である。例 (26) で数詞 11 を示す。連結辞は **dum^{wa}-* に由来する *komana* である。20台から 90台は嚮数法を用いる。例 (27) で数詞 35 を示す。A は *mo navulu-tolu* 「30」、B は *navulu-vati-na* 「第 40」、C は *mo lima* 「5」である。

- (26) *mo sanavulu komana mo 'ese*
 PART ten plus PART one
 「11」

- (27) *mo navulu-tolu navulu-vati-na mo lima*
 PART ten-three ten-four-ORD PART five
 「35」

4.6 ビッグナンバス語の嚮数法

ビッグナンバス語でも 10 台は連結辞型である。例 (28) で数詞 11 を示す。連結辞は **dum^wa-* に由来する *dəman* である。20 台から 90 台は嚮数法を用いる。例 (29) で数詞 25 を示す。A は *-nel-ru* 「20」、B は *nel-tl-nen* 「第 30」、C は *-lem'* 「5」である。ここでは、A と C の要素に人称とテンス・アスペクトを表す接頭辞が付着している。

- (28) *inal dəman iamək*
 ten plus one
 「11」

- (29) *nəv-nel-ru nel-tl-nen i-lem'*
 1PL.REAL-ten-two ten-three-ORD 3SG.REAL-five
 「私たちは 25 人だ。」 “There are twenty-five of us.” (Fox 1979:90)

4.7 ヴァヌアツ諸語の嚮数法のみとめ

六つの言語—ツツバ語、アンバエ島の一言語、タマンボ語、タンゴア語、アケイ語、ビッグナンバス語—のデータを表 1 に、これらの言語の分布を地図 2 に示す。六つの言語は海を挟んで向かい合った島々に分布している。サント島の南からマラクラ島の北とアンバエ島の三つの地域を囲む範囲に含まれる。ツツバ語、アンバエ島の一言語、タマンボ語、タンゴア語、アケイ語の五つは北ヴァヌアツ諸語であるが、ビッグナンバス語は中央ヴァヌアツ諸語であり、嚮数法は分布は北ヴァヌアツと中央ヴァヌアツを跨いでいる。そのため、嚮数法はサント島南方・マラクラ島北方・アンバエ島を囲む海域で見られる地域的特徴と言えるだろう。

表 3 にあるように、6 言語すべてにおいて 20 台から 90 台に嚮数法を用いる。Ray (1926) によると、タンゴア語の 20 台から 90 台は嚮数法を用いない場合もあるのだが、これは聖書翻訳に限られる。また、6 言語すべてにおいて 10 台に連結辞法を用いる。全ての言語において連結辞に **dum^wa-* に由来する語を用いている。しかし、タマンボ語の 10 台の連結辞法は、Jauncey (2011) によると隣接言語からの借用であり、嚮数法を使うのが旧来のやり方だと指摘している。現在 10 台に嚮数法を用いるのはタマンボ語しかないが、Jauncey の指摘から推測するに、10 台から 90 台まで嚮数法を用いるのが、他の嚮数法を持つ言語でも旧来の方法であったのだろう（表中ではタマンボ語の嚮数法を囲みで強調している）。嚮数法を持つ六言語のうち、オセアニア祖語から受け継ぐ 10 進法を残しているのは、表中で上から三つの言語—ツツバ語、アンバエ島の一言語、タマン

ボ語一であり、下の三つ—タンゴア語、アケイ語、ビッグナンバス語—は不完全十進法を持つ。タマンボ語は数詞 1 から 10 においてもオセアニア祖語を保持し、嚮数法でも旧来の用法を保っている。

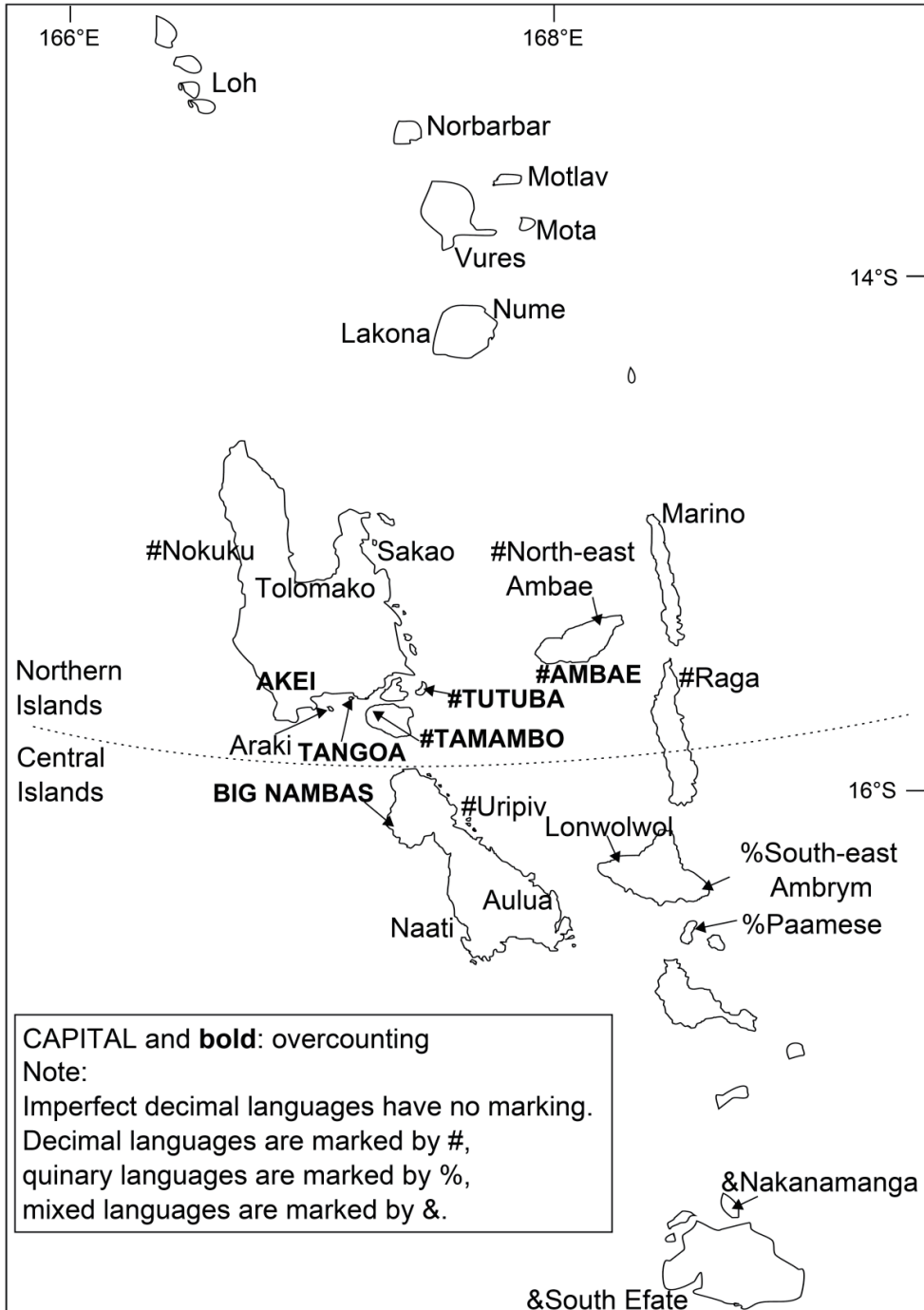
表 3 北・中央ヴァヌアツにおける嚮数法のまとめ

	10 台 連結辞	20-90 台 連結辞	10 台 嚮数法	20-90 台 嚮数法	嚮数法 省略形
Tutuba	○	×	×	○	○
Ambae 島	○	×	×	○	×
Tamambo	○	×	○	○	×
Tangoa	○	○	×	○	×
Akei	○	×	×	○	×
Big Nambas	○	×	×	○	×

○：データあり、×：データより不可能と判断

ちなみに、嚮数法をもつ 6 言語には数詞 1 から 9 までに共通した特徴がある。それぞれの言語によって形式は異なっているが、6 つの言語全てにおいて 1 から 9 まで同一の（またはよく似た）形態素が、数詞を表す形態素の前に付着している。内藤 (2011) はツツバ語においてこの形態が基数を表すと分析している。この形態はツツバ語では *e* であり、アンバエ島の一言語では *gai* であり、タマンボ語では *a* である（例 (2) の各言語の数詞を参照）。タンゴア語では *ma* または *mo* であり、アケイ語では *mo* であり、ビッグナンバス語では *i* である（例 (3) の各言語の数詞を参照）。このように数詞 1 から 9 まで同一の形態から始まることと、嚮数法との間にどのような関係があるかは今後の課題である。

地図2 北・中央ヴァヌアツにおける禱数法の分布



5. おわりに

北・中央ヴァヌアツ諸語の嚮数法は、十の倍数、次の十の倍数の序数表現、1の位という3つの要素を持つ点で、他の語族に見られる嚮数法やオーストロネシア語族の南台湾・北フィリピン諸語に見られる嚮数法とは構造を異にする。北・ヴァヌアツの中で嚮数法を持つ言語は、ツツバ語、タマンボ語、アンバエ島の一言語、タンゴア語、アケイ語、ビッグナンバス語の6言語である。これら6言語の分布は、サント島の南、マラクラ島の北、アンバエ島を囲む地域にまとまっている。これら6つの言語のうち、5つの言語は20台から嚮数法を用いる。10台から用いる古い用法を保持しているのはタマンボ語のみであり、この言語が嚮数法の古い用法をとどめている。

付録

本稿で引用している言語を言語名、島名、諸島名、参考文献の順に並べる。

LOH, Lo and Toga, Torres Islands (Codrington 1885:400), NORBARBAR, Ureparapara, Banks Islands (Codrington 1885:390), MOTLAV, Mota Lava, Banks Islands (Codrington 1885:321), MOTA, Mota, Banks Islands (Codrington 1885:302-303), VURĒS, Vanua Lava, Banks Islands (Codrington 1885:349), NUME, Gaua, Banks Islands (Codrington 1885:377), LAKON, Gaua, Banks Islands (Codrington 1885:383), MARINO, Maewo (Codrington 1885:419), NORTH-EAST AMBAE, Ambae (Hyslop 2001:94), RAGA, Pentecost (Codrington 1885:440-441), SAKAO, Espiritu Santo (Guy 1974:33, 85), NOKUKU, Espiritu Santo (Ray 1926:400), TOLOMAKO, Espiritu Santo (Codrington 1885:448-449), AKEI, Espiritu Santo (Ray 1926:383), ARAKI, Araki (François 2002:81), TANGO, Tangoa (Ray 1926:370), TAMAMBO, Malo (Jauncey 2001:159), TUTUBA, Tutuba (内藤 2011:150-156), BIG NAMBAS, Makalula (Fox 1979:88-91), URIPIV, Malakula (Ray 1926:292), NAATI, Malakula (Crowley 1998:136-137), AULUA, Malakula (Ray 1936:283), LONWOLWOL, Ambrym (Paton 1971:45), SOUTH-EAST AMBRYM, Ambrym (Paton 1971:120), PAAMESE, Paama (Ray 1926:328, Paton 1971:120), NAKANAMANGA, Nguna (Ray 1936:221), SOUTH EFATE, Efate (Codrington 1885:476)

参考文献

- Charpentier, Jean-Michel (1987) La numération au Sud-Malakula (Vanuatu). In: Donald Laycock and Werner Winter (eds.) *A world of language: papers presented to Professor S. A. Wurm on his 65th birthday* [Pacific Linguistics C-100], 105-118. Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- Codrington, Robert H. (1885) *The Melanesian languages*. Oxford: Clarendon Press.
- Crowley, Terry (1998) A salvage sketch of Nāti (southwest Malakula, Vanuatu). In: Darrell

- Tryon (ed.) *Papers in Austronesian Linguistics* 5 [Pacific Linguistics A-92], 101-148. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Erdal, Marcel (2004) *A grammar of old Turkic* [Handbook of oriental studies 8, Central Asia, vol. 3]. Leiden: Brill.
- Fox, G. J. (1979) *Big Nambas grammar* [Pacific Linguistics B-60]. Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- François, Alexandre (2002) *Araki: A disappearing language of Vanuatu* [Pacific Linguistics 522]. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Greenberg, Joseph H. (1978) Generalizations about numeral systems. In: Joseph H. Greenberg et al. (eds.) *Universals of human language* 3, 249-295. Stanford: Stanford University Press.
- Guy, J. B. M. (1974) *A grammar of the northern dialect of Sakao* [Pacific Linguistics B-33]. Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- Hurford, James R. (1975) *The linguistic theory of numerals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hyslop, Catriona (2001) *The Lolovoli dialect of the north-east Ambae language, Vanuatu* [Pacific Linguistics 515]. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- 泉井久之助 (1939) 「突厥語における数詞の組織について」『言語研究』1 : 54-59.
- 泉井久之助 (1944) 「内南洋の言語—その数詞について—」平野義太郎 (編)『太平洋民族と文化』太平洋団学術叢書上巻 : 575-630. 東京 : 河出書房.
- Jauncey, Dorothy G. (2011) *Tamambo: the language of west Malo, Vanuatu* [Pacific Linguistics 622]. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Lynch, John, Malcolm Ross, and Terry Crowley, eds. (2002) *The Oceanic Languages*. Richmond: Curzon.
- Lynch, John (2009) At sixes and sevens: the development of numeral systems in Vanuatu and New Caledonia. In: Bethwyn Evans (ed.) *Discovering History through language: papers in honour of Malcolm Ross* [Pacific linguistics 605], 391-411. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Merrifield, W. R. (1968) Number names in four languages of Mexico. In: H. B. Corstius (ed.) *Grammars for number names*, foundation of language supplementary series, vol.7, 91-102. Dordrecht: Reidel.
- 内藤真帆 (2011) 『ツツバ語 : 記述言語学的研究』[プリミエ・コレクション 8] 京都 : 京都大学学術出版会.

- 小川尚義 (1944) 「インドネシア語に於ける台湾高砂語の位置」平野義太郎 (編) 『太平洋国 民族と文化』太平洋団学術叢書上巻 : 451-502. 東京 : 河出書房.
- Paton, W. F. (1971) *Ambrym (Lonwolwol) grammar* [Pacific Linguistics B-19]. Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- Ray, Sidney H. (1926) *A comparative study of the Melanesian island languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tryon, Darrell T. (1976) *New Hebrides languages: An internal classification* [Pacific Linguistics C-50]. Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- Tryon, Darrell T. (1996) Dialect chaining and the use of geographical space. In: H. Bonnemaïson, K. Huffman, C. Kaufmann and D. T. Tryon (eds.) *Arts of Vanuatu*, 170-181. Bathurst: Crawford House Press.

Overcounting in North-Central Vanuatu languages and its distribution

Izumi OCHIAI

Abstract

Overcounting is a system of counting. In Ostyak (Uralic), for example, ‘eighteen’ is expressed as ‘eight twenty’, meaning ‘eight’ that goes toward ‘twenty’. This system is seen in some Uralic languages, Mayan languages, Turkic languages, and Austronesian languages of Taiwan and the Philippines. The overcounting construction in these languages consists of two parts: a decade and a digit. In addition to these languages, some languages in North-Central Vanuatu are known to have overcounting but with a different construction. It is composed of three parts: a decade, an ordinal expression of the next decade, and a digit (e.g. twenty, thirtieth, one “21”). This phenomenon has been known since the earliest study, but it seems that no attempt has been made to clarify the geographical distribution of overcounting in North-Central Vanuatu. This study describes the structure of overcounting in North-Central Vanuatu, identifies six languages with overcounting—Tutuba, Tamambo, a language in Ambae, Tangoa, Akei and Big Nambas—and shows that these languages are spoken in the area enclosed by southern Espiritu Santo, northern Malakula, and Ambae. This study also shows that overcounting is used for numerals higher than twenty one, except that Tamambo starts the overcounting from eleven, which indicates that Tamambo retains the old system of overcounting in this area.

Keywords: numerals, overcounting, ligature

受領日 2014年9月21日
受理日 2014年12月20日